一宮町長賞

岡山県／52歳／女性／主婦
及川（おいかわ） なみき（なみき） 様

✉手紙の相手・昔住んでいた所の近所のおじさん

私が高校に通っていた間、いつも庭先に立ち、登下校を見守ってくれていた千秋おじさんへ。

「行ってお帰り」

千秋さんは、毎朝私にそう声掛けをしてくれましたよね。今だから言いますが、私はあの頃いじめにあっており、学校に行くことが嫌で嫌でたまらず、かといって両親に心配をかけられず、重い足取りで通学していたものでした。

一般的な朝の挨拶は、「いってらっしゃい」だと思うのですが、千秋さんは必ず、「行ってお帰り」と言ってくれました。その言葉は、「行って辛い目にあったとしても、ここに帰ってくればいいんだよ」「帰る場所はあるんだよ」と言う風に私には聞こえました。その魔法の言葉をかけられたら、私の目からぽろぽろと涙があふれ、千秋さんにそれを見られるのが恥ずかしく、小さく頭を下げて、そそくさと電停まで走ったものでした。

そんな愛想なしの私を見捨てずに。毎朝暖かい声をかけてくれてありがとう。私が大学生になったときに、貴方は癌でこの世を去ってしまいましたが、私は口には出せなかったけど、感謝でいっぱいだったのです。

千秋さんが逝ってから、魔法の言葉をかけてくれる人はいなくなりました。しかし、私も歳を重ね、千秋さんの姿を目にしなくても、心の中で、自分に魔法の言葉を呼びかける術を覚えました。

千秋さん。いつも朗らかだった貴方のことですから、そちらの世界でも、さぞかし多くの人を笑顔にさせていることでしょう。私は元気にやっています。私には子どもはいないので、あの魔法の言葉は、専ら登下校をする近所の子どもたちにかけてあげています。いつか、あの頃の私のように、その言葉に勇気づけられる子がいたらいいなぁと思います。

千秋さん、貴方は本当に優しい人でした。そんな貴方が私は大好きでした。

≪手紙への想い≫

高校生になるまで、ずっと見守っていてくれた千秋おじさんに今は元気になっている私のことを伝えたいと想いました。